

特別展「浮世絵の別嬪さん—歌麿、北斎が描いた春絵とともに」

大倉集古館(虎ノ門) 24.04.09~05.06(前期) 05.08~06.09(後期)



江戸時代に花開いた「浮世絵」は、一般に零細な商工業者をはじめとする庶民によって生まれた文化であり、その需要を満たしたのが大量生産に低価格を叶えた「版画」である。一方、版画とは異なり、比較的裕福な町人を中心に享受されたのが「一点もの肉筆画」である。

本展は、浮世絵の肉筆画のうち、“美人画に焦点を合わせた展覧会”であって、この「美人画」には、流派によって面貌や姿の表現に個性があるものの、「肉筆画」には直筆ならではの冴えを感じ取ることができる。

展示品は、浮世絵が生まれる直前に手がけられた岩佐又兵衛の《伊勢物語図》、喜多川歌麿《歌満くら》、葛飾北斎《二美人図》(重要文化財)、勝川春章《雪月花図》(重要文化財)といった著名な浮世絵師の作品「86件」である。

葛飾北斎《二美人図(にびじんず)》 1806~13年頃 掛幅1幅 絹本着色
弓なりに体を反らせて立ち、顔をうつむかせて愁いに沈んでいるかのような女性は、新吉原遊郭の最高位の花魁である。一方、膝を曲げて座り、顎に手をかけて顔をあおむかせた女性は、芸のみを提供して体を売らない気位高い吉原芸者である。二人の顔形はもとより、着物や帯文様や質感の表現も完璧で乱れがなく、表装のきれいに三つの葉葵の紋所があるため將軍などの注文とされる。

本作品は、北斎美人画の代表作として定評があり、精細をきわめる細部の描写、洗練された色彩感覚も特筆される。



1-1 1-2 1-3 2 3

勝川春章《雪月花図》(1-1, 1-2, 1-3) 絹本着色 3幅対
菱川師宣《紅葉下立美人図》(2)、宮川長春《雪中遊女道中図》(3)